

■自己弁護についての訓練(2/3)

サウルは神のことに關してばかりでなく、人間的な事柄においても、適合性に欠けていたと思われる。たとえば、一度は勝ちめがないと思われたのに(13:15-22)勢力を挽回し、大勝利が目前に迫ったとき、民を力づけるどころか、かえって食物を与えないで、彼らの努力を妨げてしまった(14:24)。息子のヨナタンでさえ、こう認めざるをえなかった。「父はこの国を悩ませている。ご覧。私の目はこんなに輝いている。この蜜を少し味見しただけで。もしも、きょう、民が見つけた、敵からの分捕り物を十分食べていたなら、今ごろは、もっと多くのペリシテ人を打ち殺していたであろうに」(14:29, 30)と。

サウルは人間的な事柄について、また神に關することについて、多少の実物教育を受けていた。それを実際に役立てるかどうかは、彼の態度いかにかかっていた。もしそれを役立てるなら王位を保つが、そうでないなら失脚してしまうのである。

それから数年の月日が流れ、いよいよそれが試されるときが来た。イスラエルに敵対する残忍で執拗なアマレク人の一件である(15:1-3)。主のご命令は非常にはっきりしていたが(3節)、サウルはその一部だけしか実行しなかった。「サウルと彼の民は、アガグと、それに、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを惜しみ、これらを聖絶するのを好まず、ただ、つまらない、値打ちのないものだけを聖絶した」(9節)。サウルに対するテストは終わった。落第であることは明らかであった。至高者なる神のみことばがサムエルに臨んだ。「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ」(11節)。

民の中から選り出され、王位を与えられ、神に対する絶対服従をテストされたサウルは、及第しそこなった。そこで彼はどんな言いわけをしたであろうか。「私は主の御声に聞き従いました。……しかし民は……」と言ったのである(20, 21節)。

先に不敬虔にも軽率に祭司の職務を冒したときも、彼は同じような申し開きをして、「民が私から離れ去って行こうとし、……今にもペリシテ人が……来ようとしている（と思ったのです）」と言った（13:11, 12）。彼はいつも「民が」「ペリシテ人が」と言っては、自分の落度を他に転嫁しようとした。これらはみな、王たる者にふさわしくないことばである。

性急、短気、傲慢、これらのものは王たる者にふさわしくないばかりか、男らしい特長でもない。サウルはこれらのものに面と向かって対決し、それを克服しなかったために、反対にそれに打ちのめされてしまった。彼は年を重ね、つまらないことを考え、怒りやすく、自己憐憫の心が強くなってゆくにつれて、ますます小人物になっていった。「だれも私のことを思って心を痛めない」（22:8）という彼の悲嘆のことばは、彼のありのままの姿をさらけ出している。

自己弁護についての訓練とはこれである。すなわち、人が進取的であり、自分の性向や限界を知り、神と人に対する奉仕において活発であるなら、その人は勇気を得、寛大で、愛他的で、度量の大きな人間になることができる。しかし、もし自己弁護的な立場をとり、自分の地位、方針、手段、個性、計画などを守ろうとするなら、その結果、臆病な、利己的な、自分本位の、度量の小さい人間に成り下がってしまう。そうなった人は、感情を害されても侮辱を受けてもそれを意に介さないほどの雅量をすでに失っているのである。そのような人は、たましいのために必要な「健康法」を忘れてしまっている。

フィリップ・ブルックスは、このことに関してこう祈っている。「私が隣人に対して信頼感を失うことのないようにしてください。人が私から受けた恩を忘れ、私を裏切り、卑しめるようなことがあっても、私の心を美しく、正しく保たせてください。私を刺そうとする多くの小さなとげに目を留めることなく、また自分が他人にとげを与えることがありませんように、お守りください。」

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第八章「自己弁護についての訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。